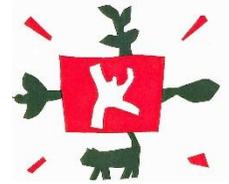


共同通信



2026年2月22日 353号(563号)

日本基督教団 西宮公会教会月報 〒662-0834 西宮市南昭和町10-22

TEL 0798-67-4691 FAX 0798-63-4044、Email koudou@gamma.ocn.ne.jp

<http://koudou.jp/> 振替 01170-3-4901

To tell the story 252

説教「安息日は人間のために…」

マルコによる福音書第2章23-27節

マルコ福音書2章27節の「…安息日は人間のためにあるのであって、人間が安息日のためにあるわけではない」は、その前の「…そして、安息日に彼が麦畑を通る、ということがあった。そして彼の弟子たちが穂をつみながら進んで行った。そしてパリサイ派が彼に言った『見よ、なぜ安息日に許されていないことをするのか』。そして彼らに言う、『ダヴィデが飢えた時に何をしたか、読んだことがないのか。ダヴィデ自身とその仲間が。アビアタルが大祭司だった時に（本当はアビアタルの父アヒメレクが大祭司だった時。サムエル記上21-1~6）、神の家にはいつて、祭司しか食べることが許されていない供え物のパンを食べ、また一緒にいた者たちにも与えた、ということ』。そして彼らに言った…」 「回答」にイエスがした言葉です。

こうして回答したとされるイエスの

「…安息日は人間のためにあるのであって、人間が安息日のためにあるわけではない」は、2000年前に言われたイエス本人に由来し言葉が、今も、私たちの周囲には、これに類する言葉・事柄が張りめぐらされています。

たとえば、その一つが、子どもたちの学校であれば、その中で通用させられている「規則」、そして学校そのものがたぶん、パリサイ派とのやり取りに習えばそしてそこにイエスが居たとすれば文句なしに、「…学校は子どもたちのためにあるのであって、子どもたちが学校のためにあるわけではない」と返したに違いありません。そんな学校は、「休んだりする」ことが「不登校」になります。

「子どもたちが学校のためにある」学校は、休んだりすると「不登校」になり、休んだ子は、昼日中はその周辺を歩き回ったりしにくくなります。文句なしに

「行くべきである学校は、それを強い規則が張り巡らせる世界を作っているのです。そして、休むという選択は「不登校」になります。

イエスだったら「なんで？」となるはずです。

始まった「政治」「選挙」の場合、そこで通用しているのは、とことん「人間は政治のためにあるのであって、政治が人間のためにあるわけではない」となっているように聞こえてきます。中でも、一番たくさん聞こえてくる人の過剰な声からは、なによりも政治の過剰が殊更聞こえてくる公約・政策「人間は政治のためにあるのであって、政治が人間のためにあるわけではない」と聞こえてしまいます。曰く、「…『責任ある積極財政』のもと、危機管理投資と成長投資で『強い経済』を実現する！」曰く、「…『給付付き税額控除』の制度設計を含め、社会保障と税の一体改革について結論を得る」曰く、「子育て世帯を支援するため『子ども誰でも通園制度』の本格実施に取り組む」曰く、「一部の外国人による制度の不適切利用が国民の不安や不公平感を助長している」曰く、「あらゆる分野において男女共同参画の視点に立った政策が実施されるよう強力に支援する」…。

「政治」の「選挙」の「公約・政策」はこんなものだろうと言うことではなく、政治の根底にあって、それを支えているはずの、人間についての洞察が語られていないことに、違和感を覚えます。こん

な「公約・政策」の結果があたかもバラ色の社会を作ることになり、「働いて、働いて、働く…」そして「私にまかせなさい」などの言説になります。今まで、そうして、「働いて、働いて、働く」この国で、2025年の「小中高生の自殺、過去最多 532人」となっています。「小中高生の自殺は前年の確定値より3人増えた。内訳は、小学生が10人、中学生が170人、高校生が352人」（1月30日、朝日新聞）。

ある限られた、狭い枠組みの人間理解がよしとされ、そこに向って走らないし競争する社会、それを象徴する言葉『責任ある積極財政』のもと、危機管理投資で『強い経済』を実現する」だったりするのです。

それって、結果的に強いるのは「より強く」「より早く」「より稼ぐ」「惜しまず使う（浪費する）」「倦まず働く」などなどだったりするはずです。そんな社会では、起こりようも生まれようもないのが「ゆとり」です。と言うか、その根本である「立ち止まって考える」「ゆっくり試してみる」「疑問を持つ」「待ってみる」「結論を急がない」「立ち停まる」などのことが許されない社会ということになります。たぶん、「公約・政策」の「…『責任ある積極財政』のもと、危機管理投資と成長投資で『強い経済』を実現する」では、人々は「より強く」「より早く」「より稼ぐ」「より惜しまず使う（浪費）」「倦まず働く」だったり美徳として求められることになります。生

き方の基本が求められ、少しでも外れることが「脱落」となって、結果的には生きにくいということが起こり、「小中高生の自殺過去最多 532 人」は、それが子どもたちの世界でも起こっていることを示しているように思えます。いいえ、起こっているのです。

以下、西宮共同教会の「公約・政策」です。

- ・人間は生きものであり、自然の一部である。
- ・傾ける耳、涙する目、差しのべる手
- ・イエス・キリストのあとに従いながら

ひとは今日の世界で
真に人間らしく生きて、行動して
苦しんで、死んでいくことができる
幸福な時も、不幸な時も、生きる時も
死ぬ時も、神に抱かれて、
人々をおおいに助けながら

これらの「公約・政策」は、西宮共同教会ホームページの冒頭に書かれています。

(尚、これら「公約・政策」に次の一項を加えるとすれば、上記のような社会に投げかけるハン・ガンの言葉「希望があるかもしれないと、希望することもまた希望だと思える」です。(ハン・ガン「光と糸」)。

祈ります。

(菅澤 邦明)



アザレア

「応援する、応援される」

1月25日(日)、この日は礼拝をお休みして大阪ハーフマラソンに出走してきました。天気予報では随分前からこの日は寒くなることが想定されていたので、いつも以上に着るものや、スタート前までの動きを想定して準備をしていましたが、当日は思ったほどの冷え込みは無く、走るにはちょうどよい気候となり、無事に走り終えることが出来ました。

“無事に”とは言ったものの、昨年の夏前に脚を故障して以来、練習量を減らしていたので18kmを超えた辺りからは思うように脚が前に出ず、ゴールまでは辛い時間が続きました。そんな時、沿道から「もう少しやから頑張れ!」「ここまで来たんやから、最後まで行ける!」「ナイスラン!」などと声をかけてもらい、なんとか乗り切ることが出来ました。

ご存じの方もいるかもしれませんが、この大阪ハーフマラソンは、大阪国際女子マラソンという日本を代表する女子ランナーが集う国際大会と同時開催で、同じコースを走るため、ハーフマラソンの大会にしては珍しく、大阪の街中を、しかも国際大会を観戦しに来ている方たちが多い中で走ることが出来る、盛り上がるの大きい大会なのです。

さて、少し話は時間を遡りますが、私が走ることを本格的に始めたのは2015年です。当時、仕事で関わっていた方々に元気なシニア世代が多く、そういった

方々と関わる中で、私も健康を意識するようになり、「自分もこのままではいかん」「今からでも始められて、続けられるものは何かないか」と考えて、とりあえず走ってみることにしました。チームスポーツはメンバーとの時間調整が難しく、一人で走る分には誰にも迷惑をかけず、お金もかからないからと考えたのが、その理由です。

最初は全く訳も分からずとりあえず走っていましたが、走った後は気持ちが良かったので3日坊主とはなりません。数か月続けた頃、何か目標があったほうが良いような気がし、折しも11月に開催される神戸マラソンのエントリー開始の記事が目にとまりました。大規模のマラソン大会はだいたい半年くらい前からエントリーが始まり、締め切り後に抽選となります。神戸マラソンは非常に人気が高く、前年の抽選倍率が約4倍と聞いていたので、「もし当選したらそこから頑張れば良いや」くらいの思いでエントリーしたところ、なんと本当に当選してしまいました。

参加費10,300円を振込み、そこから、一気に本気になりました。すぐにマラソンのハウツー本を買い、走り方、練習方法、食事、服装などの情報をそこから仕入れ、数か月準備をし、そして11月の当日、とりあえず無事にスタートを切ることができました。

自分の想定したペースで走り始めることは出来たのですが、やはり素人ランナーによくある“30kmの壁”にぶつかりまし

た。これは、エネルギーの枯渇や筋肉の疲労により、30km以降に急激な失速や脚の痛みが発生する現象のことを言います。ゴールまでの約10kmは、ふくらはぎが攣るし、前ももの筋肉は痛いし、体は冷えてくるし、散々でした。神戸マラソンともなると沿道にも大勢の人がいて、脚を引きずって歩く自分自身に対して、恥ずかしいやら、みじめやら、悔しいやら、色んな感情をもって前へ進んでいたことを今でも思い出します。

そんな中、沿道からたくさんの方が声を頂いたのですが、中でも、車いすに乗った高齢女性から、「お兄ちゃんらが頑張っている姿を見ると、こっちも元気貰うわ」という言葉を頂いたのを強烈に覚えています。ちょうど、脚が攣って、立ち止まってストレッチをしていた時のことです。「自分たちの頑張っている姿で人々を元気にしたい」と、プロや実業団に所属するようなトップアスリートがコメントしているのをニュース等で見聞きすることはありますが、まさか、「ただの一市民のこの惨めな姿を見て元気になる？」と勝手に思いましたが、もし、そうであるならばそれはそれで嬉しいことだとも思いました。

そこから先も本当に苦しい時間でしたが、沿道の方々の温かい声援、ハイタッチ等が絶え間なく続き、最後までゴールすることが出来、これが私のマラソンデビューとなりました。

ただ自分が走りたくて走っているだけで、別に誰の役に立つとも、逆に誰の迷

惑にもならず、自分のペースでやっていることであるにも関わらず、このような感情になるとは思いもよらないことでした。この経験があってから、マラソン大会が近所で行われていると、知り合いが出ていようが出ていまいが、なるべく沿道で応援するようになりました。そして、全く見ず知らずのランナーに対して応援しています。自分も経験しているがゆえに、そのランナーの状況に寄り添える気がしますし、「自分も頑張ろう」といった前向きな気持ちにもなります。それは、トップアスリート（や、チーム）に対する応援とは少し違った、もっと身近な感覚です。

こうして、見ず知らずの人に応援され、また見ず知らずの人を応援するということは、マラソンを通して私が得た大切な学びの一つになりました。そして、あれから10年経った今でも続けています（タイムはそう伸びていませんが・・・）。

さて、話は1月31日（土）に行われた「もちつき」に移ります。

当日は、小雪の舞う中、教会学校の子どもたち、保護者、教会に連なる方々がたくさん参加され、つきたての美味しいお餅を食べ、本当に豊かな時間を過ごさせていただきました。

そこで感じたことを一つ書き記したいと思います。もちつきの間、絶え間なく参加者が発していたことば、「よいしょ！よいしょ！」という掛け声についてです。

私も少しつかせて頂きましたが、あのリズムで返し手の文字通り“手”をつかないように杵を下すタイミングを心がけていました。そういった役割もあるでしょうが、何よりも、つき手への応援の意味が強いのではないかと感じました。

子どもたちが初めてあの重たい杵を持つておもちをつく姿に対する「よいしょ！」には、(大人たちが少し不安な眼差しでこどもらを見つつ) 大丈夫!、頑張れ!のようなニュアンスがあったように感じますし、また、中学生や高校生、大人がついている時にかける「よいしょ！」は限界まで一生懸命つく姿に対する鼓舞の意味が大きかったように感じました。そして、自分がついた後は、今度は声を出して応援する側に回る。自分が経験したからこそ生まれる相手への思いやりや、一体感のようなものを感じる時間でした。

普段の生活の中で、表立って応援される機会は決して多くはないと思います(少なくとも私は・・・)。応援すること、応援されることは、なにも特別な人だけのものではなく、見ず知らずのランナーに声をかけること、もちつきで力いっぱい掛け声を送ること、日常の中で相手の歩みを気にかけること。その一つひとつは小さなことかもしれませんが、そこには確かに繋がりが生まれているように感じます。

人間関係が希薄になっているとされるこの社会にあって、このような精神的、

物理的繋がりの輪が広がることを強く願います。

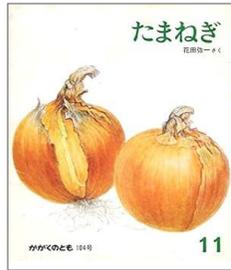
(古谷 佳之)



チコリ

今月の畑だより

雨の少ない日が続いています。たまねぎはマルチシートの穴から、少し白い玉の部分（緑色の葉っぱとつながっている、その白い部分も、たまねぎ。それらのことを学ばせてもらったのが、絵本の「たまねぎ」（かがくのとも 104号、作：花田弥一／福音館書店、1977年、現在は「特製版」）です。



淡路三原伝道所の佃さんの紹介で入手することになった苗は、とてもじょうぶに育って、いずれは、西宮・伏原町で育った「淡路たまねぎ」として登場するはずです。（苗屋さんによると、収穫予定は5月です）。

昨年、比較的多く、種じゃがいもを植え、順調に育ちました。それが掘り出どころ（収穫時期）の長雨で、畑が水に浸かってしまいました。掘ろうとしたときにも、畑は水びたしでした。結果的に、一部のじゃがいもは腐り始めていました。とても、残念だったのですが、それでも残りのじゃがいもを「泥沼」の中から「救出」ことになりました。

そんな苦労の結果、やっと見つけ出すことになったのは、伏原町の畑には埋もれてしまっていたのですが、畑に添って流れる水路への排水溝が備わっていたことです。

現在、その排水口まで掘り下げて、畑とつなぐ水路づくりの作業をしています。種じゃがいもの植え付けは、3月頃になります。かなり腐ってしまったとは言え、昨年のじゃがいもは、かなりの量でしたから、その一部は、すりおろしたじゃがいもと合いびきミンチを混ぜて「じゃがバーグ」になり、一部は茹でてつぶして、「じゃがいもだんご」になり、冷凍保存し、日曜日に集まってきた子どもたちのおやつになります。

毎週火曜日の「園芸サークル」の活動の次の作業は、寒い冬をしのいできたイチゴにシートをかけることです。「シートは、何のため？」なのか、いろいろあるのですが、白い花が咲いて、小さな緑のイチゴ、更に白っぽくなって、赤く染まって食べ頃になるイチゴが、土に触れるのを防ぐためも、その一つかなと思っています。

伏原町の畑で摘んで食べるイチゴは最高の味です。しかも、土で汚れたイチゴを洗ってではなく、そこで摘んで、そのまま口にする時に、たぶん最高の味になります。



あんなこと こんなこと

2026年1月17日(土)10時～11時ごろ
大地震子ども追悼 井本英子コンサート
アートギャラリー

井本英子さんによるコンサートが行われました。これまで高松公園(兵庫県立芸術文化センター前)で続けてきた「子ども追悼コンサート」の流れを受け継ぎ、今回は、アートギャラリーでの開催となりました。

当日は、ソプラノ歌手の高岡充子さんもお越しください、会場では、みんなで一緒に歌ったり、口ずさんだりしながら、心が優しく繋がるひとときを過ごすことが出来ました。



2026年1月17日(日)～25日(日)
大地震子ども追悼 藪本栄術 童子像展
アートギャラリー

陶芸作家の藪本さんには、子どもをモチーフとした作品を制作していただきました。1995年の兵庫県南部大地震で亡くなった514人の子どもたち一人ひとりを想い、「童子像」を作ってくださいました。

今年は、その84の童子像を展示させていただきました。また来年へと繋がりますように。



2026年1月25日(日)10時45分～12時

特別礼拝 羽柴 禎 先生

西宮公同教会 礼拝堂

沖縄県の名護伝道所より、羽柴 禎先生をお迎えしての特別礼拝でした。羽柴先生の穏やかな口調と、ユーモアを交えたお話にて、会堂は自然と笑顔に包まれ、和やかなひとときとなりました。

礼拝後の交流の場でも、笑い声が絶えず、心あたたまる時間を共に過ごすことが出来ました。

遠いところよりお越し下さり、心より感謝いたします。ありがとうございました。



2026年1月31日(土)10時～13時ごろ

もちつき

西宮公同幼稚園 園庭

子どもたち30人、そしてスタッフとして約20人の皆さんと一緒に「よいしょ！よいしょ！」と声を掛けあいながら、30kgのもち米で「餅つき」をしました。また、教会の方々や、地域の人たちにもお越しいただきました。よもぎ餅、黒豆餅、きな粉に、大根おろし、ごまだれ。つきたてのお餅をほおばる子どもたちの笑顔が、何よりのごちそうでした。朝から雪の降る寒い一日でしたが、皆さんのおかげで、心はほかほかの時間になりました。スタッフの皆さま、朝早く、またとても寒い中、お集まりくださり本当にありがとうございました。



福島東電の事故 そこから考える

大熊町の木幡ますみさんの自宅は今も帰還困難区域です。届けなしには立ち入ることができません。藪が生い茂り、陽光をさえぎっています。その薄暗い中にある家屋や納屋は傷み放題。内部は泥棒や野生のサルやイノシシが侵入して荒らされています。そのたたずまいには、15年という時間が刻まれています。

大熊町には、原発で働いていた住民が多く暮らしていました。木幡ますみさんは、そんなひとたちと日々接していました。医療関係の検査会社で働いていた頃、原発労働者の血液の検体が回ってきました。それを精密に検査するのが彼女の仕事でした。分析すると明らかに異常な数値が測定されました。これは被曝の影響だと考えられるものがいくつもあったそうです。それを会社に内緒でメモしました。そのなかには顔見知りの住民が何人もいました。その方たちがガンで一人、一人と亡くなっていきました。

その葬式に東電社員が参列し、見舞金を遺族に渡す現場をみたそうです。数十万円の額です。でも東電はガンと放射能の因果関係は認めません。地元の人間にとって、放射能はすぐそばにあるものだったのです。

今、廃炉作業が進められている原発で働く人たちの多くは、避難指示が解除された檜葉町や富岡町に暮しています。廃炉作業は、あと 50 年という時間を要します。廃炉産業が地域の主力産業になっ

ています。この地域は原発なしでは成り立たないのです。

木幡さんは、原発事故前、納屋を改装して学習塾を開いていました。東電社員の子どもたちも通ってきます。その子たちの何人かは東電に就職しています。事故後、彼らがいろいろと話してくれたそうです。

「東電本社の社員は原発事故が発生したとき、いち早く家族を県外へ避難させていた」「構内にはホットスポットがあるけども比較的低い空間線量のエリアもある」。木幡さんは地元でしか分からない情報を得ていました。

住民はどのようにして避難したのでしょうか。当時の記録をもとにまとめます。

2011年3月11日午後2時46分、東日本大震災は発生しました。地震直後、町役場では携帯電話は通じませんでした。固定電話は数台がつながっていました。FAXも1台、何とか使えました。第二原発とのアナログの直通電話は通じました。しかし第一原発との新設したばかりの衛星電話は機能しませんでした。それでも第一原発の状況は第二原発を通じて把握できました。

通信手段が十分に使えない中、町職員は、状況の把握、広報、住民の避難に取り組みました。11日、最初のうち、地震と津波被害への対応が中心でした。ほとんどの職員は、原発は何とか持ちこた

えるだろうと考えていました。安全神話が浸み込んでいたのです。

この日の午後 5 時に第一原発から「原発は安全だ」と知らせが町役場に入りました。午後 6 時に原発に近い地域（夫沢）の住民に対して「念のために避難してください」と広報が行われました。実は午後 4 時 36 分、1 号機、2 号機の非常用炉心冷却装置への注水が不能になっていたのです。

原発に近い夫沢、小入野の住民は同じ町内の内陸部へ移動することになりました。午後 7 時 30 分、総理大臣からの原子力緊急事態宣言が出されました。夫沢、小入野以外の住民には屋内退避が指示されています。

緊急の対応が必要なのは原発から 1.3 キロにある特別養護老人ホーム「サンライトおおくま」でした。高台にあるため津波の心配はないので避難指示が出されずになっていたのです。入所者、通所者が約 110 人残っていました。施設側は「夜、寝たきりの高齢者を避難させるのはリスクが高い」と渋っていました。避難を促すために派遣された町職員が説得して、点滴をつけたまま、ベッドに寝かせたり、車いすに座らせて避難しました。

翌 12 日午前 3 時 41 分、避難所の町職員に避難所の窓を締めること、エアコンも airflow を内部循環にする指示が伝えられました。午前 0 時 59 分に東京電力から「原子炉格納容器の内部圧力が設計上の最高圧力を超えている」と町の対策本部に情報提供があったのです。ベント（格

納容器内の圧力を下げるために放射性物質を含む水蒸気を外へ放出すること）にゴーサインが出ていたのです。

午前 6 時 9 分、全町避難が発令されました。避難先の一つスポーツセンターには約 2000 人の住民が待機していました。県外から派遣されたバスを使って、午前 6 時半から避難が始まります。そして午前 9 時にはほぼ避難は完了しました。このときから大熊町の時間は止まりました。

現在、大熊町の帰還困難区域は、町面積半分。そのうち特定再生復興拠点として大野駅周辺などの避難指示が解除されました。今も立ち入りが制限されているのは、町面積の約 38%です。一方、南隣の双葉町のほとんどは帰還困難区域が広がっています。双葉町の北に位置する浪江町は内陸の津島は帰還困難区域のままです。

大熊町は、原発のある浜側に市街地が形成されています。JR 大野駅があり、旧町役場もありました。そして内陸には耕作地があり、ナシやキーウィが特産品として有名でした。木幡さんも田んぼや畑で作物を栽培し、山でシイタケ栽培。肉厚のシイタケは道の駅で高値で売れました。大熊町は原発だけではなく、農業も大切な産業でした。

原発ができる前、大熊町の農家の多くは、農閑期の冬、現金収入を得るために首都圏に出稼ぎに出たといいます。その働く場が原発に変わったわけです。

浜通りの南端に位置する中心都市いわ

き市は、戦後 1950 年 60 年代は常磐炭鉱で栄えました。エネルギーが石炭から石油に変わると新産業都市として工業や港湾施設を活用した産業、さらにハイアンリゾート施設での観光産業で栄えています。

一方、大熊町や双葉町には、農業以外に産業がなかったのです。浜通りの南北格差。それを埋めるために、原発を誘致した側面もあるのです。

福島原発の電気は地元では 1 ワットも消費されません。すべて首都圏へ送電されていました。大都会の利便さを支える役割を担っていました。電気なしには、私たちの快適な生活はあり得ません。さらに福島県の只見川にある水力発電ダム。ここから得られる電気も東京へ送電されています。大都市の豊かさを支えてきたのが福島県だと言えます。

地震、津波は天災ですが、原発は人災です。この災厄は、私たちが呼び寄せたものです。この国は戦後の高度経済成長、とにかく豊かになろうとしました。私たちの社会は、便利さ、快適さを求めて発展してきました。原発をやめるということは、この快適さを捨てることでもあるのです。そして地震、津波は天災ですが、原発は人災です。この災厄は、私たちが呼び寄せたものです。

私たちの生活は科学技術の上に成り立っています。原発もその一つです。日々

の生活の快適さや利便さ、さらに健康も医療という科学技術によって支えられています。

一方、知らぬ間に私たちは、この科学技術によって制御され、支配されているのかもしれない。例えば私たちは情報技術によって PC やスマホから必要な情報を得ています。その情報をほとんど疑うことなく信じてしまいがちです。

1970 年代、学童への予防接種で数多の被害者が出ました。そして被害者たちは手を取り合って集団訴訟を闘い、賠償と予防接種法改正を勝ち取りました。

6 年前、**covid-19** パンデミックから逃れるために mRNA ワクチンが開発されました。ところが接種後、死亡したとされ、死亡一時金・葬送料を支給された件数は、**1059 件**（昨年末）です。もちろんいろいろな意見があります。

ただ一つ言えることは、政府はこのワクチンの有効性をほとんど検証していないという点です。同様に原子力発電という科学技術を安全と刷り込まれた私たちの罪は大きいと思うのです。

(四方 哲)

※参考図書 サイレントウォー 今中哲二著
講談社 2012 年

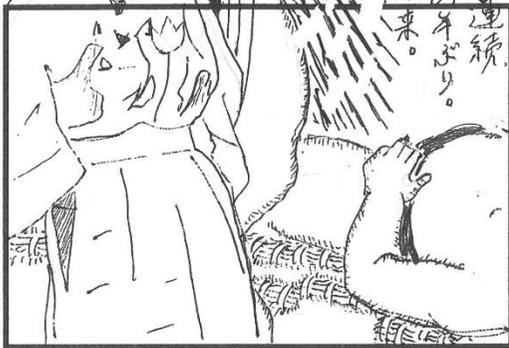
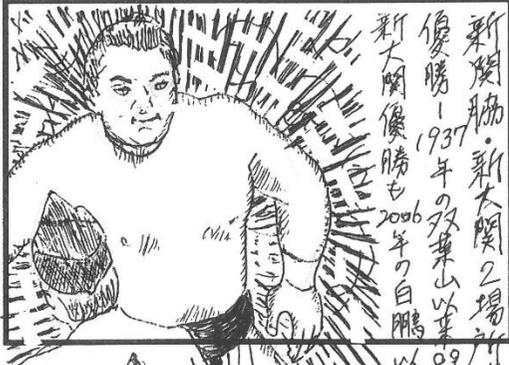
※ロシナンテ社では福島の今を PDF 版「ロシナンテ通信」として配信中です。総天然色のページです！ 年間購読代 3600 円

ご希望の方は…shikatasatoshi@gmail へ

晴水のち福ちゃん さちお画

連続V、綱とへ、安青錦

(あおにしき)



2026.1/27 朝日新聞引用しました。

晴水のち福ちゃん さちお作

物忘れケンちゃん



～♪ぼくのみる空と きみのみる空は
つながっているから～

名護七曲（153）

「春の諸祭」

毎年1月の終わり頃に沖縄島北部地方は桜（寒緋桜）の季節を迎えます。一番寒い季節ではありますが、本部町の八重岳や今帰仁城址、また名護市内でも毎年桜まつりが開催されています▼で、桜まつりが終わったら今度は2月1日からいよいよプロ野球のキャンプが一斉にスタート。球界のお祭りといえば、かつての川崎祭（2003年）がどうしても記憶から離れないわけですが、オールスター戦も然ることながら、やはりファンにとりましてはキャンプも一種のお祭り行事であろうことかと思えます▼今季沖縄にやってまいりますのはセ・パ両リーグ9球団。名護・国頭では今年も日本ハム・ファイターズの皆さんが、エナジック・スタジアム名護（名護市営球場）とかいぎんスタジアム国頭（くにがみ球場）に分かれてそれぞれトレーニングに励んでおられます。が、残念なことに私自身はプロ野球に関してそこまで関心があるわけではなく「ふ～ん」という程度。ガチ勢は違います。レギュラー・シーズン前から早くも気になって気になってしかたなく、キャンプ地周辺は連日多くのファンや取材の人たちで賑わっておる模様▼キャンプでの調整はもちろん戦略的な内容も含まれますので全てが公開される

わけではないのでしょうけれども、それでもあれだけの至近距離で選手のトレーニングを見学できるのは又とない機会。私も時間があれば久しぶりに取材に行つてこようかなって思っています▼昔プロ野球のキャンプ地といえば宮崎とか高知、鹿児島とか、海外だとフロリダ、アリゾナ州あたりが多かったように思うのですが、いつの頃からか沖縄でキャンプを繰り広げる球団が増えてきたように思います。ホークスは頑固なまてに來ないのですが…▼かつては県内の球場はどこも設備や仕様がそこまで充実していなかったのかもしれませんが。しかし、中南部のみならず今やこの北部やんばる地域におきましても、名護市営球場もはたまた、くにがみ球場も、ちゃんとプロ野球のトレーニングや試合に使えるようしっかり整備が進められてきたというわけでありませぬ▼市営（村営）ながら、どこにそんなお金が？とも思うのですが、そういえば名護市のスタジアム事業って、収支とか財源のこととか今まであまり気にしてこなかったかも。古代ローマのコロッセオ事業のことを思うと、市民として本当は両手放しで喜んでばかりもいられないのかもしれませんが。あと忘れちゃいけないのが、実は今月から春のパン祭りも始まつてるわ。

（羽柴 禎）

つとかいわ・あれこれ

教団新平 4

2026年1月24日

「菅澤邦明論——ぼくにとつての」

佐々木結（同志社大学神学部博士課程）

精神的に沈みがちだった 2025 年も終りかけた頃、本紙主筆に誘われて西宮へ行き、菅澤邦明という人と出会った。「木工職人、農業・料理・絵本（本）・詩人、西宮公同教会牧師・菅澤邦明」。これが本人によるプロフィールである。実際に会うのは初めてだったが、評判は前から聞いていた。悪評である。阪神・淡路大震災のとき、被災者支援をめぐり、関西学院の会議室に乗り込み、ナイフを突き立てて脅したという「ナイフ事件」は、ウィキペディアの「日本基督教団」のページにも載っている。※注

もちろん、この話が教団内の派閥抗争と無関係ではなく、恣意的に前後の脈絡と切り離された、誇張も含むエピソードらしいことには気づいていた。対立勢力が他方の勢力を貶めるためにこの話を利用しようとしているのだらうと私は考えていた。火のないところに煙は立たないとはいえ、だから、有名な「ナイフ牧師菅澤」に対する私の事前のイメージは、良くも悪くもないボンヤリしたものだった。なにしろ、私の生まれる前であり、歴史研究の対象にするには近すぎる時代の出来事である。

菅澤さん自身が語ったところによると、関西学院の会議室でナイフを突き立てたこと自体は嘘ではないが、大切なナイフが傷つかないよう、準備した分厚い紙束の上に突き立てたのだという。ともあれ、この「事件」は菅澤さんの人物像の一部分を示すものでしかない。用意周到。職人は道具を大切に使う。

そもそもなぜ、菅澤さんは大震災の時にそれほど怒りをあらわにしたのか。本人の話をして私が考えた結論は、怒りの背後には深く鋭い悲しみがあったということだ。

私自身の経験や歴史からも言えることだが、異常な出来事が生じた時、その異常さを直視する誠実さを持つ人間は決して多くない。多くの人は事態の深刻さを過小評価し、「たいしたことはないだらう」と信じ込み、都合の悪い事実は無視しようとする。だから、悲しまないし、怒らないし、上手に立ち回る。そればかりか、悲しむ人を嗤い、怒る人を異常だといひ、責任者を擁護する。

それは、心の平穏や組織を守るための本能なのかもしれないが、そうだとしたら、それは人間が本能的に持つ不誠実さである。暴力や性欲といった本能

と同様に、人間はそれを自ら律するべきだらう。

菅澤さんという人は、異常な出来事を「たいしたことじゃない」と考えてしまう人間の不誠実な本能を律し、悲しむべきことをきちんと悲しみ、怒るべきことにきちんと怒れる人なのだと私は思った。

年が明けて、西宮公同教会の礼拝に行ってみた。礼拝は 10 時 45 分から。会衆はそれほど多くない。説教は、『福音と世界』に掲載された田川建三追悼記事の話題から始まった。そこから、同誌における田川の連載「リーメンシュナイダーの世界」（1998 年～）について、クロボトキンの『相互扶助論』について、震災を記念して公同教会の「アートギャラリー」で開催中の「童子像展」について、自身もかつて訪ねたガリラヤのカナでの思い出…。自身の日常の出来事を軸に、あちこちに話が飛びながら広がっていく。あえて要約するならば、通底するのは、日常の小さな出会いに対するイエスの誠実さ、地上における公正と正義の実現、といったところか。

決して巧妙な説教ではない。これが真理だ！とばかりに整然たる論理によって一つの結論に導く説教や、積義、黙想、…とかいうプロセスを踏んだ説教とは異なる。日常の中で出会ったことや、考えていることを、ぼつぼつを語る説教である。それは菅澤さん自身が描くイエスの、日常的な人付き合いに関して、決してカッコつけず、一つ一つ丁寧に出会いを積み重ねていく姿に重なるものと感じられた。礼拝の最後、温かいお茶が配られた。

※注「関西学院会議室でのナイフ事件」については、「自作、自演、主演」のビデオ、DVD あります。「視聴」ご希望の方は、日本基督教団西宮公同教会菅澤邦明牧師までお申し出ください。

(K)



畑で採れたキャベツをたくさん使った餃子がメニューの日に、「まち食堂」にお邪魔しました。野菜たっぷりの美味しい食事の後の絵本タイムは、今回は「じゅげむ」(著:川端 誠/クレヨンハウス、1988年)と、「へそもち」(著:渡辺茂男、画:赤羽末吉/福音館書店、1980年)の2冊でした。



私がまだ小学生の頃、狭い道をはさんだお向かいの家の風呂場の窓が、私方の居間の方に向いていて、子どもたちとお父さんらしき人がお風呂に入っている声をちょいちょい耳にしたもんです。子どもが、湯船から上がる前に、必ず、お父さんは湯冷めしないようにとの思いだったのか、子どもたちに「じゅげむ」を唱えさせていたのです。私は多分、小学3年生か、4年生の頃で、全部は聞き取れなかったけれど、楽しそうだな、と思いながら、結構聞き耳を立てていました。特に、「くうねるところにすむところやぶらこうじのぶらこうじ ばいばいばいばいばいばいぐーりんがん しゅーりんがんのぐーりんだいぐーりんだいのぼんぼこびーのぼんぼこなのちょうきゅうめいのちょうすけ」の部分が面白くて、そこだけ覚えて、「ジュゲム」って一体何とっていました。それが大人になって、やっとな落語の「じゅげむ」と言うお話なのと知ったわけです。風呂に入ってお父さんと「じゅげむ」を唱えていた70年前の子どもたちも大人になってから、やっぱり自分の子どもと湯冷めをしないように、「じゅげむ」を唱えながら、一緒に湯船に浸かっていたのでしょうか。

(S)

冬の楽しみのひとつ、「餅つき」をしました。

餅つきは、杵で餅をつく「つき手」と、臼の中で餅を返したり水をつけたりする「かえし手」の息が合ってこそ。大切なのは、熱々の餅米を、熱々のお湯で、寒い気温の中でも素早く、できるだけ冷まさずにつきあげていくことだそうです。そうしてできた、つきたてのお餅は、びっくりするほどの美味しさで、みんなは大喜びでした。

ところが、ここでちょっとした事故が…。頭の上に杵が落ちてきて、一瞬少シクラっと。でも、周りの方々がすぐに椅子に座らせてくださったり、氷で

冷やす準備をしてくださったおかげで、その後は無事に回復し、楽しい餅つきを続けることができました。

後日、念のため病院を受診し、問診のあと、頭痛もなく、見え方や聞こえ方にも違和感がなかったため、「一応、脳ドックだと思って検査しておきましょう」と、MRI検査を受けました。結果は、脳梗塞や脳腫瘍、萎縮などもなく、血管にも全く異常はなし。「これからの頭の病気の前触れもなし」「教科書通りのきれいな脳ですね。」「僕の出番はありませんね」と先生からの太鼓判!ご機嫌で、帰ってきました。

最後になりましたが、ご心配をおかけした皆さま、本当にありがとうございました。

(K)



ハナミズキ